

倉橋惣三の保育論の現代における位置

津 守 真

倉橋惣三の保育論は、生きた子どもの事実から出発します。倉橋惣三の保育論を語るには、彼の生きた体験から表現された文章を引いて、そのことから考え始めなければならないように思います。

そして、きょうは、第一に、彼の保育論の根底にある。生きた子どもの事実を、大人である保育者は、いかにして知ることができるかという基本的な問題を考えます。第二に、倉橋惣三の瀟洒しょうさな文章のもととなっている。彼の個性的感覚について、彼の自伝にもとづいて考え、その現代的意義を見たいと思います。また、同じ内的感覚をもって子どもをとらえるとき、より一層子どもの感じ方に近づくことができます。この現代の新しい見方について言及します。第三に、理論と事実との関連についての彼の考え方について述べます。それは、保育理論を考える場合の根本態度を検討することでもあります。また、同じ内的感覚をもって子どもをとらえるとき、より一層子どもの感じ方に近づくことができます。この現代の新しい見方について言及します。第四に、倉橋惣

三の保育実践論である誘導保育について、米国の進歩主義教育との関連において歴史的展望をしたいと思います。

一 子どもを知ること

1 目は心の現象であること

まず、彼の特色のある著書である。「育ての心」の第一ページの短文の引用から始めます。

「いつも真正面から、真直ぐに相手を見る目。いつもあからさまに自分をさらけ出して、心の隅まで隠すところのない目。

いつも一ぱいに見開いて、しっかり物そのものを見詰める目。いつも新鮮さに冴えて興味心に輝く目。

いつも柔らかいなつかし味を湛たぎえている目。人の心の明るさを受けて明るく、自らもまた容易に、相手の心の中に溶けてゆこうとする目。

それよりもなお、なんとという清さに澄んでいることぞ。曇りもなく、濁りもなく、たとえばこの頃の澄んだ空の清さを、そのまま人間界に落

とし来たったような目。

それが、子どもの目である。」(育ての心 P24)

このようなむだのない文章を解説するなどということは、実に蛇足でして、とんでもないことのように思われますが、私がお話をするとなれば、私なりに考えたり解釈したことを付け加えて、このある部分を紹介させていただきたいと思えます。

「いつも真直前から、真直に相手を見る目」私どもはしばしば、目は心の窓といえます。倉橋選集の第四巻を見ますと「窓」という題の文章があります。「窓こそ面白けれ」(選集4巻 P77)と、窓のおもしろさをいろいろと述べてあります。その中で、窓というのは、目のようなもので、内部を外に見せるものであるというようないわれます。そこで、目というのは、「心」というようにおきかえてもいいわけで、「子どもの心」といってみます。

「いつも真直前から真直ぐに相手を見るのは子どもの心である。いつもあからさまに自分をさらけ出して、心の隅まで隠すところのないのは子どもの心である。

いつも一ばいに見開いて、しっかり物そのものを見詰めているのは子どもの心である。」

目を通して私どもは子どもとの心に出会うのです。そしてびっく

りして、あ、こんなところに子どもの輝きがあったとハッとします。目を通して子どもとの心に出会うことができるというのは、

それを見る私どもの目があるからです。それを見る私どもの目があるということは、その奥にそれを見るところの私どもの心があるからです。その、子どものいつも隠すところなく真直前から真直ぐに相手を見詰めてくる「目」、そして、子どもの心にふれて、私どもの中にある真直前から真直ぐに相手を見る心が開かれる。

普段は大人の心は、ねじくれたり曲ったり、曇ったりよんだりしてはいますが、そういうものが、子どもの目と心にふれて、ハッととして、こんなところに子どもの心があった、私自身もおき忘れていた心があった、ということに気が付くのです。自分の目で見ると子どもの目は、目という、いわば「もの」を見ているのです。それは単なる「もの」にとどまらず、その奥にある「ころ」のあらわれ、すなわち、現象としてみるときに、目は私どもにとって重要な意味をもつものとなります。

子どもの目に出会うには、自分の心が子どもの心そのまますっとうけ入れることができるように、自分の心からじゃま物をとり払っていないといけないのだということがさらに述べられます。

「自らを」という題の次の文章です。

2 保育者自身と子どもとの関係

「子どもを教育するのは、教育者に責任がある。しかもこれは、教育者としての一面の責任に過ぎない。此の、外へ向かつての責任と共に内へ向かつての責任がある。自分を教育することである。但し、此の責任は何ごとにもあることに相違ないが、外へ向かつて教育を行なう者に於て、特に強く感ぜられる責任である。一般の仕事は、外に向かつてのみ行なわれるのも済む。教育という仕事に於ては、そこが全く違うのである。先ず内へ向かつての教育なくして、外へ向かつての教育はあり得ないことである。

すべての教育は自己の教育に発するといつては言葉が過ぎるかも知れない。しかし、少なくとも教育の眞の迫力は、この謙虚なる自己教育の心からのみ出る。」(育ての心 P 50)

教育という仕事は、自らの内へ向かつての教育がなければ存在しないということが述べられています。自分はこれだけのことを知っているというような知識のわく組は、ともすると、子どもの柔軟な可能性をわくにはめて束縛する力をもちますから、そのようなわく組を取り去って、柔軟な可能性に当面するのにふさわしいような、自らの心の状態をつくり出すことは、自らの内へ向かつての教育の重要なことでしょう。教育者である人の心のいれものの分量だけしか子どもは教育されないということも一面の眞

理だと思えます。(もっとも、大人の知らないところで、子どもは大人の予期する以上に伸びていることも多いということも事実です。それは、もう一步考えると、大人の側に、自分が知らないところで子どもが貴重な経験をするような世界を確保しているという、大きなゆとりがあることを示すものでもあります)

子どもの目に出会って、そのあからさまにパッと見開いた心をうけいれることのできるような自らの心にしていくのには、どうしたらよいか。それには、大人自身が、いろいろの文化にふれ、教養をつんで、自分の心を豊かにするような自己教育は、もちろん、たいせつです。しかし、ここでいっているのは、大人が子どもに対するとき、それは、外に対する問題であるのではなく、自分自身の見方や考え方、あり方などによって、関係が変わってくる性質の問題であり、知覚の担い手である自分自身を反省の対象とすることが、教育的関係において、欠くことができないということです。これが、内に向かう自己の教育です。子どもにふれて過ごす保育者は、子どもとともに過ごす生活そのものの中に、そのような自己教育の機会があるでしょう。

体験は、その後に、思い起こして考えるときに、そのことの意味を一層、明らかにすることができます。それが、次の文章です。

3 保育体験を回想すること

「子どもが帰った後、その日の保育が済んで、まずほっとするのはひと時。大切なのはそれからである。

子どもといっしょにいる間は、自分のしていることを反省したり、考えたりする暇はない。子どもの中へ入り込みきって、心に一寸の間も残らない。ただ一心不乱。

子どもが帰った後で、朝からのいろいろのことが思いかえされる。

— 中略 —

大切なのは此の時である。此の反省を重ねている人だけが、真の保育者になれる。翌日は一歩進んだ保育者として、再び子どもの方へ入り込んで行けるから。」(育ての心 P51)

自らの内なる心を教育するところは、われわれの生活の中でたぐさんあちこちにあるかもしれない、まさにそうだ。だけど一つ、保育者として、どうしてもみたしておかなければいけない、大事なことは、子どもが帰ったあとの、このひと時の場である、ということを書いておられるのです。

今、私どもが、新しい、現代の思想の角度でこのことを考えても、甚だ有意義なことだと思えます。子どもと一緒にいる時は、子どもと一緒にいるということ自体が最大の仕事です。そこで、てくてく考えたりしてはいけません。子どもと一緒にいる、その瞬間

に、子どもとの間にかもし出される空気というものを大事にしなければいけない。また別の言葉でいえば、まさに大人自身が子どもと共に生命的になるといってもいいかと思えます。

「子どもが帰った後で、朝からのいろいろのことが思いかえされる」

生活をそのまま、流し去ってしまうのは、子ども自身です。子ども自身は、「今日幼稚園であったことは……」なんて反省することはありません。大人は、子どもと一緒にいる時は子どもと一緒に動いていることを大事にするけれども、子どもが帰った後は、そのことをもう一度思いかえして、それは一体何であったか、あの時のあのことはどうだったのだろうか、という反省します。これは評価なんていう簡単なものじゃないと思えます。自分が子どもと一緒にいた時に、いろいろと心の中に感じとった、微妙な体験の意識を、あとで思いかえして、その体験の意味を自分なりにたずねるといふ作業です。特別に言葉で思いかえさなくてもいいかもしれないし、また、形にならなくてもいいかもしれません。その時間を大事にして、その中で、いろいろ考えることが望ましいと思えます。

自らの内に向かう教育が、外に向う教育に先立って必要だということをおわれましたが、自らの内なるものの根底にあるもの

は、子どものあの素朴な素直な心と相通じるものがあります。

同じ「育ての心」の中に「子どもたちの顔」という文章があります。

4 大人と子どもと共通の心の探究

「この子どもたちの顔が、おとなになってどんなに変わるだろうか。この顔に髻をつけて見、この顔に髪をゆつて見るのは、想像のいたずらがさせる楽しい興味である。」

ここまではだれでもが考えるでしょう。その次に、

「しかも、この美しい貴い顔が、いつまでこのままでいて呉れるかと思ふと、かすかなさびしさが湧かないでもない。」

この目よいつまでも感に濁わずにい、この唇よ、いつまでも偽りに歪まずにいて呉れ。この頬よ、いつまでも明朗の輝きを褪せさせずにい、この顔よ、いつまでも潤達で伸びやかさを失わずにいて呉れ。

わたしは、子どもたちの顔をもう一度じつと眺めて、いつも、今のこの顔のままで、この一人ひとりを見ていたいと祈らずにいられない。」

大人になってしまうと、心が、曇ったりねじくれてしまうものですが、子どもにふれると、こんなにも素朴な、こんなにも柔らかな、こんなにもすっと通るような心があったのだとおどろきます。こういう心が一体いつどこでこんなに曲がってしまうのだら

うか、そう思うと本当に情なくなってしまう。そしてこの子どもにふれることによって、私も自身が心が洗われるような気持ちになって、すっと気持ちが通るような、そういう子どもの心を、いつまでも覚えていたいです。たとえ心がひん曲がってねじれたように見えても、誰でも心の奥に、それはあるに違いない。保育者というのは、何とまあ幸いな職業でしょうか。自分がいろいろ悩みごとがあったり、心がひねくれそうになっても、子どもの目に出会うと、きつとそれは破られて、自分の中に、子どもと共通の心があらわれて、もう一度それをだいにしようという気持ちになる。

そういうように、子どもの心そのものを、大人になっても保っておきたいという気持ちが人間にはあります。この共通な心の探究という点では、この文章は不十分ですし、また、それは、別個の大きな課題であると思います。

倉橋惣三というと、童心主義とか、児童中心主義とかいって批判されることがしばしばあります。子どもの中には、本来大人の中にもある人間のなまの姿を見いだすことができるという考えが、その底にあるので、それを、感傷的な感情論としてすて去ってしまうのでは、子どもの見方が、あまりにも、表層面にどまってしまうのではないでしょうか。

二 倉橋惣三の個性的感覚

「子供讃歌」という、倉橋惣三の自伝風のきれいな本があります。選集では、サククの中にカチッとおさまっていますが、初版本は、東山魁夷の風景画を表紙にした、軽い感じの本です。どこからでも読めます。まず、サククからとり出して、目次を見て、という重苦しさがありません。こういうところにも倉橋惣三の個性が見られます。いまは、選集の中でしか見られないのは残念です。

この書物は、日本の幼稚園の歴史のひとつとして見てもおもしろいし、また、幼児教育の根本理念が盛られているものでもあり、またとくに、自伝として見ると、一層おもしろさを増すものだと思えます。

一般に、自伝として、著者が自分の過ぎてきた体験をふりかえって見たときには、もとの体験の中にあつたけれどもそのときには十分に自覚されていなかったものが、より一層明瞭にとらえられるというところに、自伝のもつ意味があるかと思えます。その際に、しばしば、過去の体験は、論理的に整頓された形ではなく、まず、感覚としてとらえられます。ある印象的な風景や場面、情景として描写されるとき、それは著者の内的体験に忠実に

ふれていることが多くあると思えます。読者は、そのような描写にふれて、自分の中にもある同様の感覚をよび起こされ、著者に対する人間理解が深まります。それは、著者の特殊な体験を通して、普遍的な体験となる過程ともいえましよう。

倉橋惣三の、この自伝的な書物にも、感覚によつてとらえられた体験の描写がいくつもあり、そこには、彼の一貫した個性があらわれています。

少し羅列的になりますが、そのような場面をいくつか引用してみます。

「藤の房が長く垂れて、美しい紫に咲く頃には、子どもたちを一人一人抱きあげて、小さい手を花まで届かせてやる。」(子供讃歌 P14)

「秋の午後は、大銀杏の梢が明るく日に映えて、黄色の葉がひらひらと舞ってくるのを、浴びるようにして、子どもたちと拾いっくらをする。」

「書庫内の古本の読みあさり。飽きては遊園に出て子どもらとの遊び。その庭は明るくて、四季の風が動き、子どもらは、ピンピンと活きている。」(子供讃歌 P69)

「武庫山を背にした斜面の港町の八月は、明るい日光と海からの涼風にめぐまれて、さわやかである。神戸幼稚園の広い部屋の硝子窓が、いっばいにあけはなたれて、中央の大テーブルには、籠に盛られた新鮮ないろいろな果物とサイダーの泡のたつ幾つかのコップが置かれてあり、

白いテーブルクロスを、窓からの風が、ひらひらとさせている。」(子供讃歌 P 71)

「彼がそういつて、サイダーに唇をぬらすと、テーブルのむこうの望月さんが、つめたたくひやしたバナナを、銀のナイフで切つて、ガラスの皿においてくれた。」(子供讃歌 P 78)

「高貴な紫の藤の花」、
「金色に光つてそびえ立つ銀杏の樹」は、
一貫してあらわれる、ひとつのモチーフです。

それから、「その庭は明るくて、四季の風が動き」「明るい日光と海からの涼風」「籠に盛られた新鮮な果物」「サイダーの泡の立つコップ」「白いテーブルクロスを窓からの風がひらひらさせ」「つめたたくひやしたバナナ」「銀のナイフとガラスの皿」……ともうひとつのモチーフがつづきます。ここに共通の感覚は、風の動きです。風の動きが肌のおもてを流れて通りすぎる感覚があります。同じできごとに出会っても、他の人だったら、他の情景に心をとめ、全く異なった描写が行われるでしょう。ここに個性の問題があります。

いまここで、個々の感覚イメージの問題に立ち入る余裕はありません。ただ、ここで指摘しておきたいことは、ひとつの体験が、内的感覚としてとらえられているということです。体験という言葉を果ての果てのないことがら、感覚面でもとらえられるとき

に、それは既成の概念やことばに収めてしまうよりも、存外、そのことの本質的なものにふれるのだという点に着目したいと思います。そして、子どものもの、ものとのとらえ方や体験においては、内的感覚(イメージ)が重要な位置を占めています。大人でも、そのことを感覚においてとらえるということは、子どもに近いところでもとらえられることを示すものでしょう。

倉橋惣三の、子どもにとらえ方には、こういう特色があり、子どもの本質にふれたものが多いのだと思います。次の短文は、前に掲げた、自伝にみられる感覚と対をなすものです。

「幼児たちの顔、何という涼しさだろう。此の目を騒げ歩き飛び回り、遊びつづけていながら、何という涼しさだろう。——中略——
忘れた我。事に即し今に生きる真剣。熱風裡に居て知らず、汗にぬれて汗を知らぬ幼児の顔。今嗚いている一匹の蟬をねらつて、万象無に帰せる幼児の顔。悟道の極ではないが、何という心の涼しさだ。

それにしても、なんと暑くるしい我等の顔。」(育ての心 P 26)

自然の風の動きがサッと通りすぎた時の感覚が涼しさです。その同じ感覚で幼児をとらえています。大人と対比して、幼児の世界の中にある特色をよくとらえて、いいあてています。論理でもとらえるよりも、体にふれた感覚でもとらえることにより、幼児の

感覚に近づいているといえると思います。

倉橋惣三の個性的感覚について述べるならば、この自伝に見られるだけでも、沈む太陽とか汽笛とか、まだいろいろありますが、ここでは省略します。ひとつひとつの感覚についてとり上げて研究するならば、心理学的な研究課題としてもおもしろい問題です。

倉橋惣三の文章には、このような意味での感覚によって、子どもをとらえた文章がまだ数多くあります。

たとえば、子どもの「汗」(育ての心 P28)の中に、「存分に汗するほどの生活」を見ます。子どもは、一生懸命やるときに汗をかきます。一生懸命やるときに、身体的にも、精神的にも、汗がふき出していきます。「汗の出る程遊ばない子、遊べない子、汗の出ないように静かにばかり座らせられている子、汗を出すと叱られる子」はいずれも、礼讃に価する子どもの生活とはいえないとされます。

また、「弾力」(選集4巻 P73)の中では、「ボンと音を立てて、地を打って跳ね返って」落ちる椎の実と、「幼児が馳けて来てぶつかる。コッソと音でもしそうだ。そうして自分で跳ね返って飛んでゆく。」その幼児と対比させられます。長くなるので、引用しませんが、原文を見て下さい。ちょっと、抽象画を見て

いるようです。自然の成熟があるところまで進むと、自分の力ではねかえりません。自然物も子どもも、自分の力ではねかえる存在です。その弾力で「かちんかちん張り切っている」のが幼稚園の生活です。

目で見ているよりも、心の内的感覚でとらえるときに、違った見え方ができます。倉橋惣三が示しているこの見方は、現代において見るときに、新しいものの見方であるといえます。

四 事実と理論

倉橋惣三の保育論、あるいは、保育研究の前提となっている考へ方に、事実と理論の別があります。倉橋惣三は、子どもの生きた事実を、この上なく、大切に考えました。子どもを存分に生かすには、どうしたらよいかを考え、その充実した生活の中で見られる事実を重視しました。理論を先に考えておいて、事実をそれにあてはめるといふ考えをとりませんでした。このことは、「子供讃歌」の中で、自分が心理学の学生だったころのことを述べたものに明瞭に見られます。

「それにしても、彼がいつも忘れないのは、心理学教授元良勇次郎先生の御指導である。

先生は、謹厳で有名な学者で、どっちかといえば哲学的心理学者の方

だったが、アメリカでスタンレー・ホール先生に学ばれた関係から児童研究には特別の興味をもっておられた。——中略——

それに、先生はほんとうに学者らしい学者であった。理論と事実、学問と実際との間に一応はしかるべき画線を、理論は理論、実際は実際とはっきりひいておられた。それで、先生御自身は、理論の人、学問の人でありながら、理論よりも事実を捉えていこうとする彼の態度をも肯定せられた。従って理論よりも生活の生きた実際に多くの関心をもつ彼の傾向にも深い理解を与えられた。従ってまたいわゆる学者の指導に往々あるような、理論で事実を片づけたり、学問と実際関心を混同させられたりするような誤りを、一度も彼は経験させられなかった。つまり、元良先生は御自分の流儀で他を律することの、毛すじ程もない方で、彼にも、未熟のままにその流儀を伸ばさせて下さった。この点は彼ののみでなく、先生の指導を受けたすべての学生の大きな幸いであり、……以下略」

理論よりも事実を捉えていこうとする彼の態度、理論よりも生活の生きた実際に多くの関心をもつ彼の態度、これは実に、今に、新しいことだと思えます。現代は心理学のたくさんさんの理論がアメリカでも日本でも、またヨーロッパでもつくられていて、その理論にはめて幼児教育を行おうとする傾向が強い時代です。ここで考えられているのはそうではありません。子どもをまず存分に生かして、いかにしたら子どもらしく生命をほとばしらせ、生き生きとさせられるか、ということに力を注いで、そうしてできて

きたところの生きた事実そのものを大切にしていこうという考え方です。

理論というのは、いつでも事実を従わせようという傾向をもっていて、しばしばこの両者が混同されます。心理学の歴史を考えてみましても、これは明治の終りごろですから、そのころの心理学は今よりもなお一層素朴であって、理論を実際にもつていくのには非常に距離がありました。それを無理に結びつけようとするので、理論は理論、事実は事実と、それぞれを尊重しようとする態度がここに見られます。現代においては、もっと、事実に近づいた理論が考えられる傾向にありますが、どこまでいっても、理論を作ればそこからもれる事実は残り、理論と事実との間には、緊張をもった距離があります。このことは、理論につきまとう宿命ともいえるもので、その点からみれば、理論と事実との間には一線を画してそのいずれをも尊重する態度は、現代にも生きるものといえます。

盲啞学校のことを書かれたところがあります。

「いずれにしても、感覚の一つの欠陥ぐらいで、子どもとして、そんなに変わったものでもなく（あたりまえのことだが）また例外扱いすべきものでもない（あたりまえのことだが）ことを、浅いながらに実感し得たのは、盲啞学校の門前に住んだおかげだった。」

「こうして、彼の角暗期間は、いろいろの子どもによって、修業させ

られる機会に恵まれた。彼が後になって、理想の子どもとか、チビカル・チャイルドとかいうことばにあまり実感がもてなくて、各々の子どもこそ、その子どもだという具体的児童観をすっかりもち得るようになったことは、この『子ども遍歴時代』(Wander Jahre)の賜だと、今でも、その時の子どもたちに感謝している。(子供讃歌 P 38)

理想の子ども、平均的な子ども、普通の子ども、典型的な子どもというものにとらわれないで、各々の子どもこそその子どもだという具体的児童観は、その後の数十年の心理学の歴史を経た今日に、新しく生きています。"○○ちゃん"と呼ぶ、その子どもが大切なのであって、その子どもが別に平均的な子どもでなくてもかまわない、その時に、その子どもを把握するという考え方があります。

そういう意味で絵本のことを書かれたことがあります。

「子供を、その生活のままに直観したい。その直観のままを把握したい。子供の学問的研究がその前のことか後のことか分からないが、子供の教育はたしかにその後のことである。子供を把握することなしに何の教育ができれば。しかも、それは、教育のための児童研究によっては得られない。子供のための児童研究でなければ得られない。」(子供讃歌

P 62)

子どもの教育は、たしかに後のことである。後というのは、子

どもを生活そのままに直観し、その直観そのものを把握し、研究も教育もその後になされなければならないということです。よく若い方が、「もっと勉強しないと幼稚園の先生になる自信がありません」といわれます。これは理解できる点もありますが、このところできり違えないように願いたいと思います。本の上で勉強して頭でわかるのが先ではありません。これは順序が逆で、まず生きた子どもをとらえることが先であって、学問研究は、たしかにその後であるといえます。

これに類することはまだまだたくさんありますが、あと一つだけ引用したいと思えます。大学を出てすぐに、一年志願兵になったときに、いろいろの子どもと知り合ったはなしです。

「子供は兵隊が好きだった。(ほんとにそうなんです—筆者—)軍国主義的理想の一つのあらわれだったかも知れないが、心理的解釈を試みてみれば、兵隊(軍人として立とうとするのでないただの兵隊さん)は、その期間し、やばの俗気を離れた虚心担懐の心境にあった。それを少しくきとっていえばインノセンスである。インノセンスは子供の心である。そこに兵隊が子供に好かれるポイントがあったのであろう。」(子供讃歌

P 44)

私はこれを読んでとてもおもしろいと思いました。本当にそうなんです。兵隊になったら……もうだめだと思わなければ。私も

兵隊になりましたけれども、もう当分勉強もできない、本も読めない、家にも帰れない、家族にも会えない、もうおしまいだと思うんです。そうするとそこに一つの新しい境地ができてくるわけです。そういうところで子どもに出会うと、先生とか研究者とかいうのでなく、ただの兵隊さんとして子どもに会う。それで子どもは兵隊さんが好きだったんじゃないかと、私は気がつかされて、あ、おもしろいことだな、と思いました。これが、事実というものを見ていこうとするのに、大切なポイントにもなるわけだと思います。まさに私にとって自戒すべきことだと思っ

す。その子どもと出会う生きた事実の中で、一番大事なのは、子どもと共にある瞬間という事実だと思います。事実、という今流の考えでいくと、詳細に観察して、それを正確に記録して……というふうに考えやすい。そうではなくて、自分と対象とが一つになったときの事実です。そのことが『子供讃歌』の中によく出ていますが、『我が子』というところがあります。

「その小さきものの精神発達については、個々の精神活動のあらわれを記載するよりは、周囲に対する人間反応の微妙な発現を見のがさなかつた。そのスマイルは、笑いの表情そのものとしてではなく、彼に向つて、ほほえみとしてほほえみかえされ」——中略——

「彼に対して語りかけとして語りかえされ、何ごとも、心的発達（メンタル・ディベロップメント）という抽象機能としてよりは人間の中心で育つ人間の発達（ヒューマン・ディベロップメント）の刻々として喜び受けとられた。そうして、我が子において『人間』の発達のこまやかさに、日々心おどらせたのであった。そのかわいさも、この人間反応の中に互いにかわされていったのである。」（『子供讃歌』 p.92）

これは児童研究として新しい考えです。対象として子どもを引かえす、その中で、子どもを知るのです。対象化するのには、それを思考の面にもってくるときのことです。

現代の児童心理学では、どっちかというところが相手を理解するということにウェイトがかかる傾向があります。しかし知るというのは、こちらが知るばかりじゃなくて、向うがこっちを知るといふのが、むしろ先かもしれない。だから、子どもが話しかければ、こっちも話しかける。子どもがアーンと泣くと、誰かが泣いてるといふのではなくて、子どもが自分を呼んでると受けとるときに、子どもからの知られ方は違ってきます。そのように、対象としてではなく、自分が相手の世界からはなれないで、一緒になってやっつけていくところに発見するものが保育者としての知識の源となるのではないかと思います。

その瞬間に、そこでとらえたものもとになって、次の働きかけがでてきます。「育ての心」の中の「飛びついて来た子ども」

(育ての心 P 40)の「あの時」が大切です。

しかし、いうのはやさしいけれど、実践するのはなかなかむずかしいことです。そしてこれに類する文章はほかにもいくつもありませんが、このことは、子どもとふれるときの一番根本問題の一つではないかと思えます。さつきからいつている事実というのもこれであるし、子どもの心をうけとれるように自分の中からねじ曲がったものをとり払うというのもこのためのものだと思います。

それでは、いまの瞬間と、将来とはどういう関係でとらえればよいのでしょうか。それは、教育のあり方をきめるような根本問題です。ここでこの大きな問題に本格的にとりくむことはできませんが、その糸口だけをとり上げるにとどめます。

そのことを考えさせる文章のひとつは、「三月」という次の文章です。

「芽が出ていましたと告げに来る子がある。花を見つけたとって飛んで来る子がある。つれられて行って見ると、その芽は低い雑木の枝の小さい緑粒であり、その花は草の葉がくれの名もない蕾である。

『まだ、こんな小さいの……』

またしても、こんなことをいうのがおとなだ。『まだ……』それは将来のみ待って今を見落とす心、将来にのみ重きをおいて今を軽んずる心の、あさはかにも、すぎないつばやきの声である。——下略——

(育ての心 P 57)

今この瞬間の中に、将来もふくまれているという考え方です。今の瞬間をよくすることが将来をよくすることでもあります。時間を直線とみて、その線上の将来のために、今があるのではない。こう考えると、保育効果ということを考えて、現在のやり方を考えるというような考え方とは微妙な違いがあると思えます。今後、もっと明らかにしていくべき課題です。

五 歴史的展望——進歩主義教育と誘導保育

歴史的にながめてみると、倉橋惣三の主唱した誘導保育論は、今世紀の初頭に米国で台頭した進歩主義教育と切り離しては考えられません。それは、一九一五年から三五年ころを最高潮とし、スタンレー・ホール&、ジョン・デューイらを指導者として、パティ・ヒルなどが実際保育者としてすすめられた教育改革運動です。子どもの身心の発達を尊重し、興味を中心として具体的な教育活動を展開しようとした。幼稚園の中に、家や店や村がつくられ、長い期間にわたって、大きな単元活動が行われまし

た。誘導保育も、具体的な活動のあらわれとしては、この進歩主義教育とよく似ていたといつてよいと思います。

この進歩主義教育は、一九三〇年代を頂点とし、四〇年代には戦争期に入つて、一九五〇年代の後半から、しだいに知的教育が盛んになるにつれて、批判を受けるようになりました。こういう実情が外国にあつたので、日本の幼児教育界にも、その波が寄せてきたのも、ふしぎはありません。明治以来の欧米文化の輸入のされ方を考えると、日本の地盤の上に積み重ねが行われることなく、そこから生ずる必然的な問題意識なしに、西洋文明の技術面がとりいられるという一般傾向がここにも見られるのだと思います。

それでは、米国の進歩主義教育と、倉橋惣三の誘導保育とは、全く同じものなのでしょうか。たしかに、両者は切り離すことはできませんが、ここに問題があります。

倉橋惣三が、誘導保育で強調していることには、中心的興味による活動の展開と、もうひとつ、自己をふくめた子どもとの関係の中で、子どもの生きた事実をとらえるという子どもとの関係の根本問題があります。この後者について、これまでいろいろと述べてきました。当時の進歩主義教育との関連について、倉橋自身次のように述べています。

「アメリカ各地のいわゆる『新保育』幼稚園をも多く訪ねたが、どこでも彼の目のつけどころは幼児の生活の実際にあつた。『新保育』の新しいが旧を破るだけの新型だけになり易いことを彼は知っていたからである。そして彼は率直に言えば、どこでも感服したとは云い難い。」(子供讃歌 P 104)

「著名な学者や教育者は、それぞれの角度から、子どもを顧る観方を教えてくれるが、実体を教えてくれるものはどこまでも子どもそのものである。」(子供讃歌 P 104)

この点は、米国の進歩主義教育よりも、ずっと徹底して説かれている面だと思ひます。

また、誘導保育においては、幼児にふさわしい生活形態ということが強調されます。時間で区切つて遊んだり集まつたりする生活形態が、幼児にとって無理なものであることを述べて、「その無理は一体何に対してのことかと申しますと、それは、幼児の能力に対して、無理があるとか無いとかいう問題をいつているのはありません。子供の能力に不相当な教育をする。そんな無茶なことは苟も教育といわれるものにあろう筈はないのです。」(真諦 P 16)「それよりもっと根本のところ——すなわち幼稚園の生活形態に無理がないかということを中心に配しているのであります。」といわれます。

実ははっきりしています。これは、教材を幼児の能力に合わせるというのではなくて、生活そのものを幼児に合わせることの必要を説いているのです。幼稚園の生活形態が学齢前の幼児に即してつくられているかどうかということこそ、私どもの深く考えるべき点だと思います。この点は、現代もお、依然として、幼稚園界のかかえている問題です。

倉橋惣三の誘導保育は、その後、日本では保育の実践面でいろいろの工夫が重ねられて、日本の風土に根をおろしたものとなりました。それにもかかわらず、外国の流行がはいつてくると、それ以前のものとの関連は考えられずに、新なるものを追いつ、真なるものは何かを問うことをしないのは、何故でしょうか。

保育論が文化としてわれわれの中に根づくことの必要を感じます。

倉橋惣三の保育論は、本来、人間の内奥にある真実なものを、彼の個性をもって指し示したところに意義があります。ペスタロッチやフレーベルのふれた子ども、倉橋惣三のふれた子ども、われわれのふれている子ども、みな同じ子どもです。その子どもの中に、人間の真実な姿を見いだしたところが、彼らの偉大なところだと思えます。私共も、めいめいが、それぞれの個性をもつ

て、子どもの中に人間の真実を見いだすときに、だれでもが、偉大な保育者——そして、あたりまえの保育者になれるのだと思います。

(これは、今年、二月二十三日のみどり会の講演に手を加えたものである)

